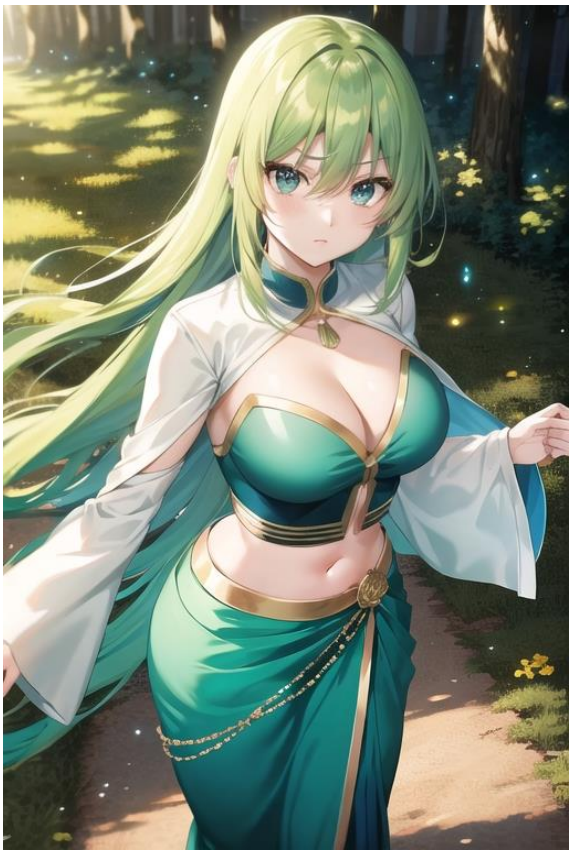
第４部:クラスチェンジ編
第 26 章:騎士団壊滅
　魔王軍が俺たちを狙って魔女の里を攻撃してきたため、彼女たちを巻き込まないよう魔女の里を離れることとした。俺たちが次の目的地を模索しているとき、王国騎士団壊滅という噂を聞いた。王国が誇る精鋭部隊が壊滅するということは、魔王あるいは残る三銃士のどちらかの仕業だろう。俺たちは騎士団が壊滅したという首都エトワールの北方の街道へやってきた。



タカ in アイリーン:「！あれは王国騎士団のみんな？壊滅したのではなかったのか！？」
アイリーン in タカ:「タカ、待って！様子がおかしいわ。」
　騎士団と思われる集団は魔物が出るかもしれないというこの街道を無警戒に、まるでピクニックを楽しむかのように歩いていた。俺たちはしばらく離れて様子を見ていたが、害はなさそうなので、顔なじみの騎士トムに声を掛ける。

タカ in アイリーン:「トム、騎士団が壊滅したと聞いたが無事だったのか？」
トム:「えっと～、どちらさまでしたっけ～？」
　そうか！アイリーンのカラダだから俺がわからないのか。俺はアイリーンを呼びトムに事情を説明した。

トム:「あ～、そっか～！騎士団の仲間の人なんですね～。でもあたし、もう騎士団はやめたんです～。ごめんなさ～い m(_)m」

先ほどから違和感がある。トムはこんな話し方をしない。これはトムではないのか？
アイリーン in タカ:「気をつけて！強い魔力を感じるわ。」
街道の前方に女性が舞い降りる。この登場の仕方…只者ではない…
オリビア:「良くわかりましたね。初めまして。オリビアと申します。」

タカ in アイリーン:「これはお前の仕業か？」
オリビア:「トムさんのことですか？」
タカ in アイリーン:「そうだ！催眠術で操っているのか？それとも魔物が擬態しているのか？」
オリビア:「どちらでもないですよ。トムさんの肉体は確かにトムさんのものです。ただ、中身は別の方ですね。」
アイリーン in タカ:「憑依か入れ替わりってことね。」

タカ in アイリーン:「お前がトムたちを葬ってカラダを奪ったということか！」
オリビア:「トムさんたちは先日の大雨によるがけ崩れで亡くなっていたんですよ。あたしはトムさんの肉体に彷徨える魂を宿してあげたのです。」
そうか、壊滅したというのは天災によるものだったのか…

アイリーン in タカ:「あなた三銃士よね？なんでこんなことをしたの？騎士団に魔族を憑依させて魔王軍を強化しようと言うの？」
オリビア:「確かにあたしは三銃士だけど、トムさんたちを魔王軍に入れるつもりはないです。トムさんに憑依した方は人間の女性で、彼女が言う通り騎士団を辞めるということですので。」

第 27 章:最強とは…
タカ in アイリーン:「いまいちお前のやりたいことはわからないが…俺たちは三銃士のスルトを倒したんだ。俺たちとここで戦うというのか！」
オリビア:「いいえ。そのつもりなら先ほど不意打ちを掛けています。スルトさんは三銃士最…」
タカ in アイリーン:(お決まりのあれを言うのか…)
オリビア:「…強ですから。」
タカ in アイリーン:「え…？最弱って言おうとしたんじゃ…」

オリビア:「間違いなく最強です。敵が弱い順に登場するとは限らないでしょう。それに強さにも色々とあるのです。あたしは亡くなったカラダに魂を宿しただけ。ちゃんとカラダの持ち主には他の人の魂を入れることの了承を得ているんですよ。彷徨える人間の魂を救ってあげているのだから、あたしと戦う理由なんてないんじゃなくて？」
　言われてみれば…トムは天災で亡くなっている。彷徨える魂が新たな肉体を得るということであれば問題ない気もする。

アイリーン in タカ:「あの…トムさんたち…男のひとのカラダに生まれ変わって生きていくことになってもいいの？」
チサト in トム:「あたし、チサトって言います～。男の人になっても生き返れるなら嬉しいですよ～☆騎士団を辞めるのは申し訳ないですケド…夢だったお花のお店“リコリコ”を開くためにこのカラダを使わせてもらいます～💕このカラダなら体力もありますし…タキナも…ねっ💕」
タキナ in ジェリー:「はい！あたしもピアニストの夢を叶えるため、このジェリーさんのカラダに乗り移りました！この逞しい腕で力強い演奏ができるのではないかと、今からワクワクしています！」

タカ in アイリーン:「トム…ジェリー…」
　俺はかつてトムとジェリーと騎士団で仲良く喧嘩しながら過ごした日々を思い出す。
アイリーン in タカ:「オリビア、あなたはどうして魔王さまに従っているの？」
オリビア:「魔王さまの思想に共感したからですよ。あなたたちは魔王さまのことを誤解してらっしゃるわ。アイリーン、あなたは魔王さまから離れたのでしょ？」
タカ in アイリーン:「俺とアイリーンは、人間と魔女が共に歩むために、そしてうジャに憑依され

たエレナを救うために戦っているんだ！」
オリビア:「そう…それならあなたたちと魔王さまの進む道は大きく違わないわ。悪しき力は滅びる…正義なき力は無力…ただ…」
　オリビアはそう言い掛けて戦闘態勢をとった。やはりこうなってしまうのか…
オリビア:「力なき正義もまた無力ということです。気が変わりました。あなたたちの実力を見せてください。行きますよ。二人で構いません。全力で掛かって来なさい！」

第 28 章:姉妹関係
アイリーン in タカ:「タカ！トルネードをお願い！」
　俺は小さく頷くとトルネードを発動し、アイリーンの剣にそれを加えた。俺たちの新必殺技、トルネードディザスタだ。アイリーンの剣がオリビアを捕えた…と思ったら、オリビアは素早く身を交わした。それならと俺はストップの魔法を発動させる。
オリビア:「時魔法ですか。なかなかいい魔力です。でも…」

　ストップの魔法でオリビアの動きは止まった。だが、オリビアはストップの魔法を受ける前にマジックバリアとフィジカルバリアを同時発動していた。せっかく止めたのに、俺の魔法もアイリーンの剣も有効なダメージを与えることができない。
オリビア:「あたしは攻撃魔法を使うことはできません。でもこんなことはできるんです。」

オリビア:「マニピュレーション！」

俺はオリビアの魔法をまともに食らってしまった。しかし、何もダメージがない？

オリビア:「その魔法を受けたあなたはあたしの妹となるのです。あたしを姉と思い慕ってくれます。」

俺の脳にオリビアの声が直接響く。最初はノイズのように感じていたそれが心地良い声に変わって行く…この人は俺の、いえ、私の姉…

オリビア:「さあ、タカ君、アイリーンを攻撃しなさい！」

タカ in アイリーン:「はい。オリビア姉さま…」

俺はオリビア姉さまの指示に従いアイリーンに向かってトルネードを連発する。

アイリーン in タカ:「タカ！目を覚まして…」

オリビア:「無駄ですよ。あなたが倒れるまでタカ君はあなたを攻撃し続けます。」

タカ in アイリーン:「オリビア姉さまはチサトさんやタキナさんたちの夢を叶えた素晴らしいお方…姉さまの邪魔は私がさせない！」

アイリーン in タカ:「完全に洗脳されてる？あたしの声は届かないの？」

オリビア:「タカ君、アイリーンに風系魔法は効果が弱いようです。元の自分の肉体の属性が風ですからね。あなたの魂の属性である土魔法で攻撃してみると良いですよ。」

タカ in アイリーン:「はい…オリビア姉さま…」
　私はオリビア姉さまのアドバイスを受けて土魔法を錬成する。
タカ in アイリーン:「ロック！」

　私はロックの魔法をアイリーンに向けて放った。
アイリーン in タカ:「初級とは言えタカが土魔法を使えるなんて…」
オリビア:「タカ君は心の中ではあなたの方が実力が上と認めているようですね。と同時にあなたに認められたい、役に立ちたいという気持ちがあるようです。その気持ちを増幅させてあげたのです。」
アイリーン in タカ:「そうだったんだね…でも、まずいわ…タカのこのカラダは水属性だから土魔法は分が悪い…それにタカとは戦いたくない…それなら…」

第 29 章:姉さまのために
オリビア:「やはりあたしに向かってきますね。」
アイリーン in タカ:「あなたを倒せばタカの洗脳が解けるのよね…ファイアブレイド！」
　アイリーンは自ら錬成したファイアを剣に乗せオリビア姉さまに斬りかかるが、いとも簡単に避けてしまった。
オリビア:「先ほどのトルネードディザスタという技に比べれば、かなり威力が落ちてしまいますね。これではあたしのレベルの相手と渡り合うことはできませんよ。」
タカ in アイリーン:「オリビア姉さま。私がアイリーンの相手をします。」
オリビア:「素直な可愛い子ね。」

　オリビア姉さまは私の髪に触れ、頭を優しく撫でてくれた。私はうっとりとして姉さまの愛撫を受け入れた。
タカ in アイリーン:「私にお任せください。アイリーン、これを受けてみなさい！怒れ、大地よ！アースクェイク！！」
　アイリーンの足元が大きく揺らぎ無数の岩が彼女を襲った。アイリーンは大ダメージを受けた。

アイリーン in タカ:「タカ…アースクェイクも使えるように…なっていたんだね。」
　アイリーンはぼろぼろになりながらも嬉しそうな表情をしていた。そんなアイリーンに容赦なく次の攻撃が繰り出される。
タカ in アイリーン:「アイリーンを取り巻く、その理を我が意思に委ねよ！グラビティ！」
アイリーン in タカ:「あ…重力魔法まで…」
オリビア:「アイリーン。このままだとやられてしまいますよ。あなたはタカと戦いたくないようですが、絶対にあなたが彼に勝てると思っているのならそれはあなたの慢心ですよ？」

アイリーン in タカ:「！確かに…最初にタカと戦ったときから、あたしの方が強いと思っていたかもしれない…でもタカもこんなに強くなっている。あたしが本気で戦ってもどうなるかわからない。」
アイリーン in タカ:「ゴメンね、タカ。本気で行くわよ。受け取ってあたしの想いを！」
　アイリーンは右手でアイスを左手でファイアを錬成した。それらはそれぞれ成長し、吹雪と獄炎となった。

アイリーン in タカ:「ブリザード・エラプション！」
　氷の嵐と炎の渦がタカに向かっていく。
オリビア:「タカ君、この魔法は風がベースよ。自らの風を衝突させ動きを停止させるのです。」
タカ in アイリーン:「はい。オリビア姉さま。」
　私はオリビア姉さまの言う通り、ブリザードとインフェルノにそれぞれトルネードを衝突させた。氷と炎の威力は弱まらないものの、魔法はその場で停止している。これで大丈夫。

オリビア:「良くできましたね。それでいいのです。」
アイリーン in タカ:「うふっ💕あたしもこれでいいの。今の魔法はタカを足止めさせるためのもの。本当の攻撃はこれからよ！」

第 30 章:妹と兄と

気が付くと私の目の前にアイリーンが近づいていた。

アイリーン in タカ:「ちょっとだけ痛いかも…ごめんね…タカ…ギガブレード！」

私はアイリーンの技の直撃を受けてしまった…

タカ in アイリーン:「ごめんなさい…オリビア姉さま…私…お役に立てず…」

私は涙を流しそのまま意識を失ってしまった。

アイリーン in タカ:「タカ、安心して。峰打ちよ…あたしももう動けない…」

そう言うとアイリーンも意識を失った。

オリビア:「気がついた？二人とも。」

アイリーン in タカ:「はっ…」

アイリーンはカラダを起こして身構える。

オリビア:「大丈夫よ。危害は加えないわ。タカ君のマニピュレーションもあなたの攻撃で解除されたみたいだし安心して。」

俺は二人の声で目を覚ました。俺たちは家の中のベッドで寝ていたようだ。

タカ in アイリーン:「あれ？俺…何をしていたんだっけ…」

オリビア:「ゴメンね。あなたたちの力を引き出すためとは言え、あなたにあたしの妹になるよう暗示を掛けさせてもらったの。」

そうだ！俺は自分が操られていた間、意識はあった。そのときの言動を思い出す。
タカ in アイリーン:「アイリーン、ごめん、俺…」
アイリーンはそう言い掛けた俺の口をキスで塞ぎ、優しく抱きしめてくれた。俺は幸福感に包まれ呆けてしまう。
アイリーン in タカ:「いいのよ。あたしの方こそあなたを理解していなくてごめんね。」
俺は嬉しさのあまり涙ぐんでしまう。
オリビア:「はいはい。あまり見せつけないでくださいね。」

アイリーン in タカ:「オリビア、でもどうして三銃士のあなたがあたしたちを成長させるようなことを？」
オリビア:「先ほど言った通りあなたたちは魔王さまを誤解してらっしゃる。私たちは共通の目的を叶えるために、あなたたちの力が必要となるのです。」
タカ in アイリーン:「共通の目的…」
オリビア:「今はまだ言うことはできません。あなた方が強くなりたいなら稽古をしてあげてもいいです。ただ…お願いがあるのですが…」

俺たちはしばらくオリビアの家にお世話になり稽古をしてもらうことになった。代わりに彼女からのお願いと言うのは…
タカ in アイリーン:「オリビア姉さま、お風呂の準備ができました。お先に入ってください💕」
アイリーン in タカ:「オリビア、背中を流すよ！」
オリビア:「ありがとう。タカ君もアイリーン兄さんも一緒に入りましょ💕」
そう、俺が妹として、アイリーンが兄としてオリビアと家族のように過ごすこと。オリビアには家族がいなく人間のこうした関係に憧れていたそうだ。妹という役割をこなすことで俺が女であることを自覚できれば、魔法の発動にも有利になるはずだ。

第 31 章:決意の夜

俺たちは入れ替わりが解除されると、すぐにまた入れ替わってきたが、それ以上のことはしてこなかった。ある夜、いつものように入れ替わりが解除され、俺は元のカラダに戻った。禁欲的な生活を続けてきたためか、俺は人肌が恋しくなりアイリーンの部屋を訪れた。
タカ:「アイリーン…俺…」
アイリーン:「言わなくてもわかるわ。さっきまであたしのカラダだったから…あたしを抱きたいんでしょ？」
俺はアイリーンの質問に答えず恥ずかしそうにアイリーンを見る。
アイリーン:「あら…もしかして抱かれたかったのかしら？あたしとして💕」

俺は小さく頷く。そしていつものように入れ替わりの行為をした。

俺は再びアイリーンとなり、アイリーンと共にベッドでアイリーンの愛撫を受けている。

アイリーン in タカ:「どう？あたしのカラダ…」

先ほどまで抱きたいと思っていた女性のカラダが今は自分のものとなり、その快感を享受している。

タカ in アイリーン:「俺、アイリーンのカラダになれて良かった…」

アイリーン in タカ:「ありがと。あたしもタカのカラダになれて満足してるよ。でもまだこんなもんじゃないわよ。あたしのカラダは。可愛がってあげる💕」

俺が呆けていると、俺になったアイリーンは俺の胸の谷間からその山に向かって指を這わせる。そして指が頂点に達するとそれを弄ぶように手でこねくり回した。

タカ in アイリーン:「うお…くは…」

アイリーンの艶めかしい声色で男らしい喘ぎ声が続く。

アイリーン in タカ:「こういうあたしもいいわね💕」

俺となったアイリーンの別の手が俺の股間に伸びる。先ほどまで俺が出し入れしていたその割れ目に俺の指が今度は俺自身の中に侵入してくる。

アイリーン in タカ:「どう？挿れられる感覚は？新鮮でしょ？」

ぞくぞくっとカラダの奥に向かって幸せが溢れる感覚…俺はシーツを掴んで必死に耐えてい

たが、ついに耐え切れなくなり、元の俺の腕に身を寄せるように近づいた。

タカ in アイリーン:「あ…あう…」
アイリーン in タカ:「嬉しいわ…あたしのカラダでそんなに感じてくれて…あたしのここもあなたを求めているの。わかるでしょ？あなたなら…」
　俺はアイリーンに操られるようにアイリーンのものとなったおちん〇んを自分の割れ目に導いた。指よりもさらに強い快感が俺を襲う。
タカ in アイリーン:「大きい…こんなのが入るのか…」
アイリーン in タカ:「大丈夫よ。ここはあたしのおちん〇んを受け入れる準備はできているわ。ゆっくり挿入してあげるけど痛かったら遠慮せずに言ってね。」

第 32 章:初体験💕
　アイリーンは肉棒を巧みに使いこなし、俺の中に出し入れしている。俺は初めてアイリーンと結ばれた！
タカ in アイリーン:「アイリーン！いいっ💕」

　アイリーンもエッチな満足そうな表情となり、俺のカラダに快感を与え続けている。俺もアイリーンを悦ばせようと自ら腰を動かしリズムを合わせた。

アイリーン in タカ:「あたしのカラダ、使いこなしているわね。タカはもう女性としてやっていけるわ。これからはずっとあたしのカラダのままでいいのよっ💕」
タカ in アイリーン:「ずっと…アイリーン…」

　俺はアイリーンの提案に心躍ってしまった。こんな快感がずっと味わえるなんて。
アイリーン in タカ:「うふっ💕またあたしのおちん〇んの締めつけがきつくなったわね。可愛いっ💕」
タカ in アイリーン:「アイリーン、俺、我慢できない！」
アイリーン in タカ:「あたしもあなたの数箇月分溜め込んだ精液があたしの…いえ、あなたのお〇んこに入りたがっているわ💕」
タカ in アイリーン:「アイリーンもずっと我慢してきたからね…でももう解放してくれ！アイリーンの濃いのを俺の中に注いでくれ！」

アイリーン in タカ:「ああ…カラダの奥から何かが上がってくるわ💕これを放てばいいのね。」
タカ in アイリーン:「そ…う…あ…ああ…」
アイリーン in タカ:「受け取って！タカ！あたしの想いを！」
タカ in アイリーン:「う…ああん…はい…💕」
　アイリーンのおちん〇んからどくどくと精液が俺の膣内へ注がれた。かなりの量だ。
タカ in アイリーン:「あ…ン…あんっ…あんっ…💕アイリーン💕」
　俺の、アイリーンの口から喘ぎ声が漏れる。俺はそれを残らずいただくためにアイリーンのおちんちんを強く抱きしめた。
アイリーン in タカ:「あんっ…あんっ…あんっ…💕タカ💕」

アイリーン in タカ:「気持ち良かったわ…男の人がこんなに快感なんて💕」
タカ in アイリーン:「俺もアイリーンのカラダがこんなに気持ちいいなんて思わなかった。本当に俺がずっと使ってもいいのか？」
アイリーン in タカ:「ええ…さっきの交わりであたしたちの魂は入れ替わったまま固定されてしまったわ。魔女と入れ替わって互いにそのカラダに満足しちゃったらもう元には戻れないの。」
タカ in アイリーン:「そうか…あの…俺、妊娠しちゃうのかな…」

アイリーン in タカ:「それは大丈夫よ。ピルの魔法を掛けておいたから。」
タカ in アイリーン:「今はまだ早いからな。でも魔王を倒してエレナを取り返したら…」
アイリーン in タカ:「ええ！そのときはあたしたちの子を💕」
　俺とアイリーンは顔を見合わせて微笑んだ。聖魔女タカと魔法剣士アイリーンが誕生した瞬間だった。新しく生まれ変わった俺の姿は、これまでのアイリーンの美しさ、気高さに加えて、その瞳に優しさが宿っていた。

　いきなり騎士団壊滅…魔王軍の仕業と思いきや、自然災害のせいでした。亡くなったトムとジェリーには、オリビアの魔法によってチサトとタキナという女性の魂が乗り移って肉体としては復活します。三銃士のオリビアが何故こんなことをしたのかは、魔王の真の目的と何か関係があるのかもしれませんネ。亡くなった人の肉体に別の人の魂を入れるというのは、賛否が分かれるところかもしれませんが当事者同士が納得していれば良いような気がします。

　最初に登場した中ボスは「あいつは四天王最弱…」と次に登場の中ボスに言われがちです。脳筋で実はいい人なのに仲間から蔑まされる不遇なこともありますね…

　アイリーンとタカはオリビアのサポートがあったとはいえ、本気でぶつかり合うことで成長し、新たな技を習得します。そして今度はオリビアの元で修行することになります。お互い理解を深めることでアイリーンとタカは初めて結ばれ、入れ替わったまま魂が固定されてしまいます。もう後戻りはできないです（笑）。それにしてもオリビアの家でこんなことをしちゃうなんて…オリビアにばれたら大変なことになりそうです。